

## ハートのぶかぶか

「これよ、これ！やっぱ夏はこうこなくっちゃ」

立ち上がり、やや興奮気味に言っておるのは、薄手の半袖に短いスカート姿。総じて青色を感じさせる小柄な少女——えりか君だ。

「そうですねえ」

腰を下ろし、眩しそうに宙を見上げつつ応じているのは、やはり小柄なつぼみ君。薄桃色のつなぎスカート。いや、ワンピースだったか？ 言い間違えて、何度かフラワーに怒られたな。

二人がいるのはいつものことだ。だが

「見て、この青い空」

む。青い空か。

「白い雲です」

うむ。白い雲だ。

「ギラッとした太陽！」

うむうむ。輝く太陽、確かにな。

「そして、この澄んだ水ですよ！ 気持ちいいですか、コッペさま？」

むう。そこが、わからんだ。吾輩の背中が水に浸かっているのが。

不快など特にない。それよりつぼみ君。吾輩は、なぜここにおるのだ？

「やー、やっぱ夏はこうでなくちゃ」

吾輩は、できることならため息をついていただろう。尋ねたつもりが聞き流されたのだから。

「あとは、砂浜が欲しいんだけどねえ」

だが、これは流せんな。

砂は嫌いだと以前言っただろ、えりか君。改めて訊くが、なぜ吾輩は浮いておるのだ？ こんな湖の真ん中で。

吾輩の腹の上から見下ろす二人の笑顔を見て、吾輩は確信した。

3 ハートのぶかぶか

これは嵌められたな、と。

\*\*\*\*\*

もとはと言えば吾輩のせいなのだろう。今にして  
思えば、だが

「いやあ、らくちんらくちん♡」

「いいんですか、えりか。寝っ転がっちゃったりして

「なーに言ってるのよ。ここまできたらあんたも共  
犯でしょ、つぼ、みっ！」

「うわわわっ！引っ張らないで あいたっ！」  
腹の上でぶざけあう二人を見ながら、吾輩は思っ  
た。口は災いの元だ、と。

この二人に吾輩の言葉が聞こえるようになってか  
ら、季節は半分ほど巡っただろうか。それ故、つい  
言ってしまったのがいけなかったのだ。

「ねえ、コッペさまだって涼しいでしょ？」

吾輩の腹に寝転がりながら、顔の方を向いて、え  
りか君がそう言う。

多分、涼しいというのだろうな。これは。

「涼しくないの？」

吾輩の感じる温度は、えりか君たちとは異なる  
ようだ。みどりの城の中も、この水面も、さほどは  
変わらぬ。

言ったとたん、その頬が大きく膨らむ。吾輩は素  
直に答えたつもりのだが、言葉というものはな  
かに難しい。

そうむくれた顔をするな。吾輩に涼を味あわせ  
ようという気持ちは受け取った。ありがたいことだ。  
だが

「だが？」

えりか君の後ろから、つぼみ君までが顔を出した。  
覚えていないわけもなからうが。

吾輩が腹に乗せる者は、君たちではなかったと

思うのだが？

\*\*\*\*\*

そう、きつかけは、あの日差しの強い日のことだろう。学生の皆がなつやすみとやらを迎え、揃って吾輩の城 フラワーの温室を訪ねて来たときだ――

我がみどりの城――温室は、夏には人が少なくなる。

今年は特に、フラワーが二人目の孫にかまつてるせいで、吾輩だけしかないことが多い まあ、これもまた平和ということなのだが。

それでもたまに人通りはあるので、昼間は我がみどりの城の民たちの世話をしやれない。この身体が動けば、騒ぎになるからな。

吾輩はここに居り、ただ居るのみ 無論、それが平和の代償と思えば、不満もないが――そう思っ

ていたとき、ふと頭に声が蘇よみがえったのだ。

(この戦いが終わって平和になったら

してくれないか？)

突然頭に流れてきた言葉に、吾輩ははつとした。

おお、そうだった、忘れておった。そんな時が来るなど、考える余裕もなかったからな。

しかし思い出した以上、友の望みは叶えて 叶えてやれぬまでも、伝えねばいかん。

「コッペさま、ちわーっす！」

お？この挨拶は と、我が城の入り口を見ると、学生服姿がやってきた。一人、二人。

えりか君だな。よく来た。おお、ゆり君もか。

「ええと わたしも来てるんですけど」

二人の後ろから現れた小さめの学生服が一人。うむ、これはしくじった。

ああ、もちろんわかつてある、つばみ君。ただ、ゆり君に伝えないといかんことを思い出したのでな。

「え？ ゆりさんに？」

「私が、どうかしたの？」

つぼみ君たちがぐるりと振り返って言うのを、目を見開きながら、ゆり君が答えておるな。

「あの コツペさまが」

「ゆりさんに、伝えたい事がある、って」

「私に？」

まあ、仕方もあるまい。残念なことだが、ゆり君に吾輩の言葉は聞こえぬのだから。

えりか君。吾輩の言葉を伝えてくれんかな。

吾輩はそう言っつて、少し喉を鳴らした。

少しでも、正しく伝えられるように。

\*\*\*\*\*

やっば、わかっちゃうかあ

コツペさまの顔をいつもと違つ角度で見ながら、あ

たしはそう思った。

もうちょっと、普通にコツペさまに乗つかつてたかつただけど。でも、あれ聞いちゃうとね——

「えーと、ん、うんっ！」

あのとき、コツペさまの真剣な声を聞いたあたしは、できるだけきちんと伝えようと思つたんだ。

「なに、えりか。いきなり咳払いなんて」

そう、それこそ、咳払いまできつちり、ね。

「あー、ゆり君！」

「は？ ゆりくん？」

おっと、いけない。

「あー、違つ違つ。これ、コツペさま言葉なんだ。ゆりさんには聞こえないから、伝えてくれつて。

続けるよ」

ゆりさんがうなずいたのを見て、あたしはまた、ちよつと上を向いた。

「ゆり君。吾輩はひとつ、コロソに頼まれたことが

ある」

「コッ、コロン!？」

言ったとたん、ゆりさんが叫びながら、いきなりあたしの首元にしがみついていたんだよね。

「ちよ、ぐえ、く、苦し」

「あ、いじめんなさい。ちよっと落ち着くわ　どつぞ　これ、びっくりしたなあ。真に迫りすぎちゃったのかな? それじゃ、ちよっとあたしに戻して、と。」

「すまん、って謝ってるよ、コッペさま。それでね、コロンと約束したことなんだけど　ゆりさんを、乗せて欲しいって言われたんだって」

「乗せる? って、コッペ様に?」

「そ、なんでもね、コロンはコッペさま並に大きくなったら、ゆりさんを乗せてあげたかったんだって。だから代わりに、コッペさまのおなかに乗せてあげて欲しいんだって」

「コロンが、おなかに私を　?」

あ、だんだんゆりさんの顔が赤くなってる。なん

だろ?

「ゆりさんは、イヤ?」

「ええと、そつ、じゃないんだけど。でも、やっぱり　ちよっと遠慮するわ」

真つ赤な顔で走って温室から出ていくゆりさんを、あたしはつぼみと顔見合せて、ぽかーん、としてたっけ。

「なに、考えたんだろ。ゆりさん?」

「さあ　」

\*\*\*\*\*

ゆり君に伝えた言葉もそうだが、その後を気に止めなかったのが吾輩のミスだ。

まさか本気とは、まったく考えていなかったから  
な――

「この場でゆりさん乗っけるつもりだったの、コッ

へさま？」

ゆり君が我が城を出て行ってしばらくしてから、えりか君が言ったのだ。なんの話か気づくのに時間を要したほどに突然に。

その通りだ。吾輩が外に出れば、余計な混乱を招く。

それでもなんとか気づいて答えたものの、そこには怪訝けげんそうな顔が二つ。

逆に問うが、えりか君たちは、吾輩がどこでゆり君を乗せるつもりだと思ったのだ？

「それは 海とか」

「ええ、バナナボートみたいに浮いているコッペさまに乗つかれば、あまり目立たないかなー、とか思っていました」

「夏だし、ねー」

なるほど、それは聞いたことがある。しかし、

断る。

吾輩は、一言強く言った。できるならば、まなこ眼をつむって言いたかったくらいだ。

「へ？」

もはや使徒たちに恨みなどないとはいえ、やはり砂は嫌いだ。

「んー じゃあ、湖だったらどうでしょう？」

どうあっても、吾輩を水に漬けたいようだな。吾輩が少し肩を落とすと、えりか君がじつと吾輩を見つめながら近づいてきて、

「せつかくの夏休みなんだもん。海か山に 行ってても、コッペ様いつも植物に囲まれてるから、海がいいかなー」

ふむ。それは悪いとは思わん。行ってくるかい。吾輩は、この城を守る。

言おうとすることを最後まで言わせぬ吾輩に、やれやれといった二人の顔だけが、最後まで頭に残った。

\*\*\*\*\*

ふう

「さま」

思い出しても、ため息をつきたくなることだ。

周囲を見れば大きな湖のようであるし、岸からはやや離れている。近くにあるボートは、つばみ君たちでも四人ほどしか乗れそうにない。となると、吾輩は自力でここまで来たことになるが？

「ペさま」

わが城の近くに、このような湖はない。海ならあるが、吾輩の嫌いな砂もなさそうさ。

「ッペさま、つてば！」

ふむ。とすると、ここは

プリキュアパレスの湖か！

「うわぁー！」

「び、びつくりしたぁ。何度呼んでも答えてくれな  
いんだもん。どうかしちやったのかと思った」

ああ すまぬな。ちと思い出していた。恐ら

くは、なぜここにいるのかのモトをな。

「そうー！だつてさ、コッペさま人を気にしすぎなんだもん」

「ここなら、どんなに動いても平気ですよ」

なるほど、吾輩は浮島代わりか。

それならば、まあよかるう。

吾輩はそういうと、しばらく黙ることにした。

やはり口を出すと、碌ろくなことがない。

\*\*\*\*\*

「はあ」

コッペさまの顔から離れておなかに腰を下ろしたとたん、なんだか、ため息が出ちゃいます。

「やつぱり、コッペさま乗り気じゃないみたいです。

また黙っちゃいましたし」

「ゆりさんじゃないからかなあ？」

隣に座ったえりかが、そう言います。そんなこと  
ない、とは思うんですけど

そう考えてたら、隣がぼんつ、と跳ね起きました。  
「でもほら、つぼみのおばあちゃんが言ってたじゃ  
ん。コッペさまがどうでも、あたしたちは楽しみな  
さい、って。」

ず〜と夏季講習で忙しい、つぼみの息抜きだっ  
て兼ねてるんだからね、これ」

ああ、言わないでください。思い出すと、頭が痛  
いです。それに、

「えりかだって、勉強しなきゃダメでしょ？」

「まあね。つぼみとは違つ勉強だけど、一所懸命やつ  
てるよ。でも、だからさ、遊ぶときゃ、遊ばな  
きゃ。ね。」

ふふ。やつぱり、えりかはえりかです。すつこく、  
気が楽になつちやいますね

「そんじゃ、とうつー！」

とか思つてるといきなり行動するのめりかなん

ですよ。まったく！

どぼん、という音と、空中を舞う洋服。それを置  
んでビーチバッグに詰めてると、水着姿が水面から  
現れました。

「ほーら、つぼみも来なよ。ちゃんと下に着て来た  
んでしょ？」

それは、そうですね。やつぱり、ちよつと恥ず  
かし。え、足、が、つかまれます！

「ほーらほーら。はーやく脱がないと落として濡ら  
すぞお〜」

「ひ、引つ張らないでください！ 脱ぎます、脱ぎ  
ますからつっ！！」

\*\*\*\*\*

どうやら二人で、泳ぐことにしたようだ。その  
方が、この子たちにはよい。

吾輩はしばらく目を宙に向け、水の流れを感じて



いた。

横からゆつくりやってくる水。下からわずかに持ち上がる水。

二人で吾輩のまわりをぐるぐると回ったり、潜ったりしておるのだな。

しばらくそのまま感じていたものの、上がってくる様子もない。さて、空を見上げてばかりもなんだな。ふむ。吾輩も、少し潜ってみるか。

吾輩は、腹の上に置き去りになつてゐるツルツルした靴(カビ)をふたつ、脇のボートに置くと、身体に力を入れた。

力が入るたび、体が重くなる。ゆつくりと水が背から脇、さらに腹から顔へと上がつてきて、そのうち吾輩の目は、水中を見ていた。

おお、二人とも元気に泳いでおる。潜水しているのはえりか君か、どれ。

調子はどうかな？

「がぼっ!? がぼげべ!!」

いかん。水中で声をかけるのは危険だったか。両方の手につぼみ君とえりか君を支えながら浮かび上がると、吾輩は声をかけた。

二人とも、そろそろ休むとよい。おやつにしよつ。

先ほど浮かぶときに見えていた。フラワーのことだ、おそらくは と、腰のあたりに手を伸ばせば、縄のようなものが引つ掛かる。やはり、か。

よつ、と。

ざざあ、と大きな音をたてて、持ち上げた吾輩の手から水が流れ落ちる。

そこに残つたものは、吾輩の手にちょうど乗るくらい大きな玉だった。鮮やかな緑と黒の縞模様の玉。

「あ、スイカです」

「スイカスイカ、あれ? でも、どーやって切ればいいの?」

吾輩はスイカを手の上で少し転がしてみた。うむ、

これなら問題あるまい。

「それはもちろん棒で あっ—」

「そつそつ。コッペさまのお腹の上でスイカ割り、つてわけにもいかないでしょ」

それでも構わんが、もう少しきれいに切れるぞ。ふむっ！

吾輩は一本だけ伸ばした爪を、勢いよく西瓜に立てた。カツツ、と軽い音を立てて、赤い果肉があらわになる。

「すっ」

「ごい、です」

ふむ。驚いているな。

以前、そら殿に勧められて、鍛えてみたのだ。もう数十年も使っていないが、なんでもやっておくものだな。だが、吾輩自身はこのような面倒なことはいらん。

吾輩は左手を上げると、流水の中から出てきたもう一つの西瓜を口元に持ってきた。

「まさか」

「まるごと!？」

縞模様の玉が身体にすうっと入ってゆく。やはりフラー— 我が友にぬかりはない。

うむ、果肉も皮も美味い。吾輩は、植物ならほとんどのものを食せるのでな。子供が真似せぬよう、普段は口にせぬのだ。だが、君たちの前なら問題なかるう？

その瞬間、大きな口を開けて皮ごと食べようとしているえりか君の動きが、ぴたっ、と止まった。

「そ、そうだよ。真似なんて、そんな子供みたくない。ダメだからね、つぼみ！」

「わたしはしてませんっ!!」

\*\*\*\*\*

大きなスイカを食べられるだけ食べると、二人とも吾輩の上で横になってしまった。

やや傾いてきた日は、もうじき夕焼けになりそうに見える。ここに時間など必要のないのに、あいかわらず無駄に凝るな、我が友は。

「それにしてもさあ〜」

「はい〜?」

寝転がったふたりが、間延びした言葉を交わしている。一つ前の年では考えられぬ、平和な光景だ。

「最初にコツペさまのお腹に登った時思ったんだけど、顔が下にあるの見てると、踏んでるような気がするねえ?」

「ああ。そう言えば、そうですね。あんまり気分はよくないかも」

「コロンって、踏まれるの好きなのかな?」

「ええっ!?!」

平和な光景　やれやれ。

「それって、それってまさか、そういうことなんですか??」

「オトナだからねえ、ゆりさんは」

平和で済ましても良いのだが、さすがに我が小さき友の名誉は、守れねばならぬな。

なにが大人かは知らんが、誰彼構わず踏まれるのが好きというわけではないぞ。コロンはな、ゆり君には何度も寝たままで抱えられたことがあるから、いつか吾輩のように大きくなったら、乗せてあげるのが夢だったようだ。

「ふむふむ。上じゃなくて、下になりたい」と

「えりか。それ、わざと言ってますよね?」

「ニラまないですよ。ちょっとしたギャグじゃない、ギャグ」

えりか君はまったく　よし。

わからんな。その何処がギャグなのだ?

「へ?」

声が二つ重なったのを逃さず、吾輩は言葉を続けた。

参考までに教えてくれんか? 後輩の妖精たちは、理解したほうがよいだらうからな。

「シフレに理解させちゃダメですうっつ!!」  
「コフレにも、ダメだからねっつ!!!」

\*\*\*\*\*

「そ、そ、それはともかくです!　　なんかわたし  
たち、流されてませんか?」

つぼみ君がそう言うのを、吾輩は不思議に思いつ  
つ見ていた。当たり前ではないか、と。だが、  
「うわあ〜っ!　な、なんで陸が見えないのよっつ!  
ここっつて、そんなにおっきな湖だっけ!?!」

「知りませんよ!　えりかが勧めたんじやないです  
か、ここなら人も居ないし、つて!」

二人で叫びあうのを眺めていて、吾輩はようやく  
気づいた。なるほど。知らずに来たというわけが。  
ということとは、だ。

問題ない。

吾輩の声に、二人の顔がこちらを向いた。しかし

吾輩は、そちらではなく真上に向かって、大きく口  
を開けて声を発した。

「見ておるのだろっつ、わが友よ!!」

久しぶりに、音として発した声があたりに響き渡る。  
腹の上の二人があまりの音に耳を押さえた手を、  
ゆっくり離し始めたころ、空から声が帰ってきた。

『はい、なあに?』

確かめるまでもない。我が友、フラワーの声だ。

そろそろ、彼等を返してやってくれ。

『はい、はい』

空の一部がやや赤みを帯びて、そこから真っ直ぐ  
光が降りてくる。

吾輩の腹の上の、二つの影に向かって。

「彼等をつて　わたしたちですか?　コッペさま

は!?!」

『ごめんね。今の私には、いっぺんに運べないのよ。  
あなたたちでは細かい操作ができないし』

光の中、二人がゆっくり登ってゆく先。フラワーの残念そうな声に、吾輩はすぐさま応えた。

吾輩はもうしばらく、ここで休んでゆく。気にすることは無い。

「っていうか、あたしたちの洋服っ！」

えりか君の声が小さくなって消える頃、吾輩はやっとその意味に気づいた。

そうか、二人とも水着のままだったか。

脇のボートの上で揺れる二つのバッグを見ながら、吾輩は思った。

平和にはなかなか慣れんな、と。

\*\*\*\*\*

日が沈み、薄暗い空に月が昇ってきた。プリキュアパレスなのだから、昼夜などなくてもよいのに、つくづく凝り性なことだ。

「コッペ」

来たか、我が友よ。

いつの間にか、吾輩の隣に浮かぶボートに人がフラワーが座っていた。だが驚くには及ばぬ。いつものことだ。

「どう、コッペ。つまらなかつた？」

そのようなこと、あるわけがなかるう。

「そうよね。だって、つぼみもえりかちゃんも、あんなに楽しそうだったもの。でもね、コッペ」

フラワーはボートを吾輩に近づけて、そっと両手のひらを腹に押し付けてきた。

うん？

「もつともつと楽しそうな顔が見れるのよ。あなたが二人に、もつと楽しんでいるところを見せれば」

吾輩は手を広げ、ボートごとフラワーを腹の上に乗せた。

平和とは、面倒なことだ。

「面倒？ それだけかしら？」

ボートの上から、以前より皺の増えた笑顔が、吾輩を見つめている。

海へ行く手段はあるのかな？ 我が友よ。

友が頷くの見ながら、吾輩たちは湖を後にした。

—おしまい—